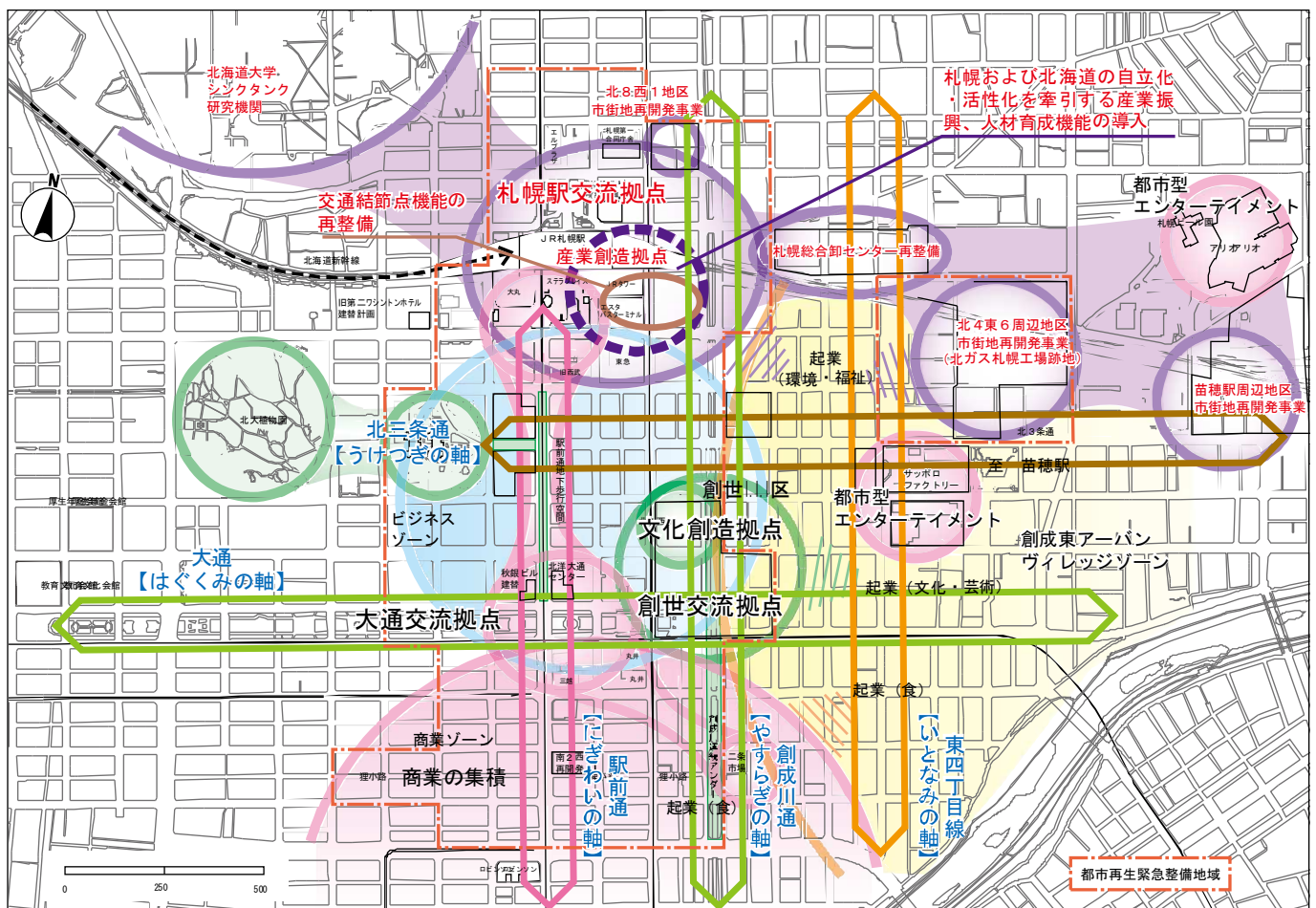


- ・今後北海道で成長が期待される健康分野において、国の新健康フロンティア戦略※³を見据えた新たな健康産業の展開や、今後の更なる少子高齢化の進展を踏まえた都心居住を支える医療・健康・福祉ビジネス等のインキュベータ機能、起業化促進・支援機能の導入を図る。

例：札幌駅交流拠点を含む都心のエリアマネジメント活動の一環として、低廉な賃料で事務所や店舗を貸し出すなど、起業しやすい環境の形成を図る実践的な取り組みを推進

図 札幌駅交流拠点周辺の機能集積状況と開発動向からみる役割



※³：新健康フロンティア戦略の趣旨（新健康フロンティア賢人会議）

国民の健康寿命の延伸に向け、国民自らがそれぞれの立場等に応じ、予防を重視した健康づくりを行うことを国民運動として展開するとともに、家庭の役割の見直しや地域コミュニティの強化、技術と提供体制の両面からのイノベーションを通じて、病気を患った人、障害のある人及び年をとった人も持っている能力をフルに活用して充実した人生を送ることができるよう支援する。

(3) パブリックライフ展開方針

1) 基本認識

札幌都心におけるパブリックライフは、これまで大通公園を中心に展開されてきている。ここで大通公園におけるパブリックライフの歴史をひも解いてみると、明治4年に火防線として整備されて以来、競馬や農業博覧会の開催、逍遙地や運動場、スケート場のほか、戦時中には食糧確保のための畑としても活用された。その後、雪まつりをはじめ、夏まつり（ビアガーデン）、ホワイトイルミネーションなど、様々な展開が図られ、今日に至っている。

札幌駅交流拠点におけるパブリックライフは、駅前広場を中心にその展開が図られているが、どちらかといえば点としての展開にとどまっており、大通方面や創成川以東地区へのネットワークが弱いというのが現状である。

今後は現在整備が進められている創成川通や駅前地下歩行空間をはじめ、都心の4骨格軸・1展開軸・3交流拠点を中心に展開が強化されると考えられるが、その際、出会い・ふれあいといった都市の極めて大きな魅力を醸成するため、パブリックスペース（場合によってはセミパブリックスペース）における質の高い空間づくりが重要となる^{※4}。

※4：ヤン・ゲール（Jan Gehl：デンマーク王立芸術学院建築学部アーバンデザイン科主任教授）は、その著書「屋外空間の生活とデザイン」の中で、公共空間で行われる屋外活動を、学校や仕事に行くといった必要活動と、散歩などのレクリエーション活動に代表される任意活動、およびこれらの発展形で他の人々との出会い・ふれあいといった交流を伴う社会活動の3つに大別している。このうち必要活動は屋外空間の質に左右されにくい、任意活動とその発展形である社会活動は影響を受けやすいことから、出会い・ふれあいといった都市の最も大きな魅力のひとつを醸成するためには、屋外空間の質が極めて重要であると指摘している。

2) 基本方針

都心におけるパブリックライフは、働く、学ぶ、遊ぶ、住む、といった基本的な都市の生活を支える人と人、人と都市とのコミュニケーション活動^{※5}であり、イベント交流や文化活動、ビジネス交流などを通じて育まれる人々の連帯感や都市を楽しみ、誇りに思う姿が、魅力的な都心の風景を創出する。

都心ならではの豊かなパブリックライフは、いつも何か起きていて刺激に満ちていること、また逆に、都心にいながらホッとする居心地のいい空間があること、そしてそこでは、都市に生活する人同士の、あるいは観光で訪れた人々との「コミュニケーション活動」がなされ、都心の魅力が伝播されていくこととなる。

ここで重要なのは、これらの展開が単なる商業的展開ではなく都市への愛着や誇りを醸成し、それが人々のコミュニケーションによって広く伝播していくものかどうかという点である。

札幌市は情報公開では全国一といわれているが、今後は公共空間等におけるパブリックライフの展開についても、都心まちづくり戦略でいう重層的なエリアマネジメントを推進し、札幌流の持続可能な生活文化の創造をめざすべきである。

2010年の夏まつり（ビアガーデン）は、夜間の営業時間の短縮やスピーカー音量の制限が行われたが、こうしたマネジメントを主催者や地域住民だけでなく、広く札幌市民やその他の民間企業も参画して継続的に展開してはじめて生活文化の創造につながるのである。なぜなら、都心におけるパブリックライフは市民みんなが享受すべきだからである。

本構想では、こうした市民・企業・行政の共創によるパブリックライフの展開を札幌流と定義し、次のような方針を設定する。

- ① 魅力的な都市の風景の創出
- ② 協調的呼応空間の形成
- ③ まち歩きの基軸回廊の形成
- ④ テラスストリートの創造

※5：ここでいうコミュニケーション活動とは、都市のもつ空間や歴史・文化、人々等と出会い、触れ合うことによって、都市のよさ、素晴らしさを体感する、あるいは自らが都市活動に参画することによって、新たな都市の歴史・文化等の創造することをいう。これらの行為により、結果として人々の都市に対する愛着や誇りが醸成される。

3) 具体的な取り組みイメージ

① 魅力的な都市の風景の創出

人々が様々な交流活動に参加する、まち歩きを楽しむ、豊かな時間を過ごす、そういった活動を可能にする都市空間を創造し、都市の魅力を高める。

(短期的な取り組み)

- ・ 4 骨格軸・ 1 展開軸・ 3 交流拠点を中心に、日常的な憩いの空間としての活用のほか、各種イベントやフェスティバル等により、魅力的なパブリックライフの展開を図る。
- ・ 札幌駅南口駅前広場は、パブリックライフの起点としての利活用を促進する。
- ・ このような都心の魅力を醸成するために、行政はビジョンを明確化し、民間は公開空地や緑を提供するとともに、パブリックライフにかかわるルールづくりを市民とともに共創していく。
- ・ パブリックライフの展開イメージとしては、例えば次のようなシーンが考えられる。

- 新しい名所となる創成川通では、文化創造拠点を核にして、芸術家のみならず、市民参加による様々なアートイベントがいつも行われている。駅前通りや大通では「だいどんでん」をはじめとする大道芸が繰りひろげられている。
- 札幌を代表するお祭りとなった「よさこいソーラン祭り」や、長い歴史をもつ「北海道神宮御神輿」も毎年祭典区を変えながらも、必ず札幌の顔である「まち歩きの基軸回廊」を渡り歩く。
- 四季の変化を楽しむ工夫として、例えば北海道の短い夏を満喫するビアガーデンは大通のみならず、創成川の水辺とともに、あるいは駅周辺の屋上でも西方の山々を眺望しつつ楽しむ。また、長い冬を満喫するため、夏のビアガーデン会場は歩くスキーコースやスケートリンクとして活用するなどが考えられる。

② 協調的呼応空間の形成

札幌駅交流拠点から連なる骨格軸沿いは協調的呼応空間の形成を誘導していく。

(短期的な取り組み)

- ・ 札幌駅交流拠点から骨格軸に連なる都市空間の協調的・一体的な形成を図るため、協議会などの関係者間の協議の場や実施に向けた体制づくりを図る。

(中長期的な取り組み)

- ・ 札幌駅交流拠点、とりわけ南口の駅前街区は道都札幌の玄関を降り立った瞬間の印象を決定づける重要な空間であることから、駅前広場と呼応し、かつ性格の異なる広場（例えば大樹の木陰広場など）の形成を目指す。

- ・将来的に5・1街区と5・2街区の一体的整備が進められる場合には、例えば高層階の「壁面線」を既存の北5西4街区に合わせるなど、協調的な空間形成を誘導する。
- ・また、各街区相互の連携強化と界限空間の形成を図るため、単調なグリッドパターンを楽しく裏切る屋内外のフットパスが連絡しあうことが望まれる。(例えば、アスティ45の駅と道庁をつなぐ斜めパスなど)

③ まち歩きの基軸回廊

シーンや歩行形態が様々に変化する「基軸となる歩行者動線」を形成する。

(中長期的な取り組み)

- ・4骨格軸（札幌駅前通、創成川通、大通、北3条通）及び1展開軸（東4丁目線）に加えて北5条通および北8条通で、ストリート文化が感じられ、パブリックライフが楽しめるまち歩きの基軸回廊を形成する。
- ・このため、現在北3条まで整備が進められている創成川通の親水公園化をさらに北へ延伸する。
- ・まち歩きの基軸回廊では、将来的に次のようなシーンがイメージできる。

○札幌駅を降り立って駅前の交流広場を眺めつつ、2階デッキにより東方向へ向い、やがて創成川に到達し、芸術と緑につつまれた創成川通を散策。創世交流拠点を経由して大通り公園を西に散策すると駅前通にいたる。駅前通は晴れた日は地上を、雨・雪の日は地下を選択できる。

- ・また、北5条通においては、190万都市でありながら豊かな自然が間近に感じられるようにするため、西方にそびえる山々（手稲山、三角山、円山、大倉山等）の眺望を妨げないよう街路の植栽に工夫を施すとともに、セットバックなど民地側の協力により小さな森や大樹の木陰空間を形成する。